

十字架への道

(ルカ19・28～40)

一、先に立って進んで行かれた

28節に書かれている「イエスはさらに進んで、」ですが、新改訳2017の引照付聖書には欄外に、別訳として「先に立って進んで」とあります。口語訳と新共同訳はこちらの訳になっています。口語訳は「イエスはこれらのことを言ったのち、先頭に立ち、エルサレムへ上って行かれた。」であり、新共同訳は「イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムの上って行かれた。」です。口語訳と新共同訳によれば、主イエスが自ら立ち上がって先頭に立ち、エルサレムを目指して進んで行かれ、それに十二人の弟子たち、及び群衆に近い弟子たちが追隨したという構図が見えてまいります。

主イエスは活動を開始された後、ある一点を見つめて歩まれました。それは、「わたしの時」とか「イエスの時」と書かれている「時」です。イエスがおっしゃった「時」とは、多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえる（ルカ9・22）という「時」でした。主イエスは、その務めを果たす日が間近に迫っていることを知り、エル

サレムを目指し、先に立って進み行き、弟子たちの集団がイエスに従って行きました。これが、28節の意味かと思われまます。

二、主がお入り用なのです

29節から31節をご覧ください。（ルカ19・29～31）主イエスの言葉によれば「向こうの村に入ったら、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながらているのに気がつく」というのです。さらに「それをほどこいて、連れて来なさい」とおっしゃるのです。そして、「もし『どうして、ほどこのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい」と言われました。はたして主イエスがおっしゃったとおりにになりました。32節、33節です。「使いに召された二人が行つて見ると、イエスが言われたとおりであった。彼らが子ろばをほどこいていると、持ち主たちが、『どうして、子ろばをほどこのか』と彼らに言った。」とあります。当然と言えば当然です。すると、34節です。「弟子たちは、『主がお入り用なのです』と言った。」と書かれています。こうして、子ろばの持ち主は、それを了解してくれました。ところで、イエスが言われ、弟子たちが語った「主がお入り用なのです」ですが、「主」とはだれのことなのでしょう。また、この成句（フレーズ）は何を物語っているのでしょうか。「主」とは、

主イエスのことであると言えます。主イエスは御自身のことを「主」とは言われませんでした。「人の子」と言われていました。ダニエル書に出てくる「人の子」です。ですが、珍しくここでは御自身のことを「主」とおっしゃっています。ですが、もつと深いメッセージが語られていることを知ります。「主がお入り用なのです」は、元の聖書には「それ（子ろば）の主がお入り用なのです」と書かれています。イエスをお乗せすることになった子ろばは、「向こうの村」のある家につないであつた子ろばです。子ろばは、その家の所有物でした。ですが、子ろばの主人はだれなのかというなら、神を信ずる者にとつては、主なる神であるということになります。すなわち、子ろばの主人は神が人となられたイエス・キリストであり、父・子・聖霊なる神なのです。ここから教えられることは、私、ないしは私たちの主がお入り用としているなら、それに応えていくのが「道」であるということです。

それは、決して重荷にはなりません。主が、すなわち父・子・聖霊なる神が、私を、あなたを、私たちを、皆さんを必要としておられ、「あなたの主が、あなたの持ちものの主が、お入り用なのです」とおっしゃっているからです。この御声を聞き、応えていくのは、信仰者として喜びです。

三、十字架への道

主イエスはエルサレムを見つめ、そこで待ち受けている苦しみを思いつつ、子ろばに乗って進んで行かれました。弟子たちは自分たちの上着を子ろばに掛けて、主イエスをお乗せしました。さらに、弟子たちの集団も自分たちの上着を脱いで、主イエスをお乗せした子ろばが歩む道に敷きました。36節に「イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。」と書かれています。（人々）とは、前後関係から、主イエスを慕ってついでにきた、群衆に近い弟子たち集団です。彼らは興奮していました。メシアなるお方がエルサレムに入城して神の国を建国し、ローマの圧政から解放放つと期待したからです。人々の興奮は最高潮に達し、神を賛美して言いました。38節です。「祝福あれ、主の御名によつて来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」と。

ですが主イエスは、群衆に近い弟子たちが反対者になることはご存じでしたし、また弟子たちが裏切ることも察しておられました。それを見越して、弟子たちのために祈られました。そして、自分から進んで十字架への道を歩まれました。神の御意思であると確信したからです。主イエスは救いの御業を完成されただけでなく、私たちが歩むべき道の模範を残されました。